

節操

国木田独歩

青空文庫

『房、奥様の出る時何とか言つたかい。』と佐山銀之助は茶の間に入ると直ぐ訊た。

『今日は講習会から後藤様へ一寸廻るから少し遅くなると被仰いました。』

『飯を食せろ！』と銀之助は忌々しさうに言つて、白布の覆てある長方形の食卓の前にドツカと坐はつた。

女中の房は手早く爛瓶を銅壺に入れ、食卓の布を除つた。そして更に卓上の食品を彼所此処と置き直して心配さうに主人の様子をうかがつた。

銀之助は外套も脱がないで両臂を食卓に突いたまゝ眼

を閉て居る。

『お衣服をお着更になつてから召上つたら如何で御座います。』
と房は主人の窮屈さうな様子を見て、恐るゝ言つた。御氣慊を
取る積でもあつた。何故主人が不氣慊であるかも略知つて居るの
で。

『面倒臭い此儘で食ふ、お爛は最早可いだらう。』

房は爛瓶を揚て直ぐ酌をした。銀之助は会社から歸りに何処
かで飲んで来たと見え、此時既にやゝ酔て居たのである。酔へ
ば蒼白くなる顔は益々蒼白く秀でた眉を寄せて口を一文字
に結んだのを見ると房は可恐と思つた。

二三杯ぐいゝ飲んでホツと嘆息をしたが、銀之助は如何考

がへて見ても忌々しくつて堪らない。今日は平時より遅く故意と七時過ぎに帰宅つて見たが矢張り妻の元子は帰つて居ない。これなら下宿屋に居るも同じことだと思ふ位なら未だ辛棒も出来るが銀之助の腹の底には或物がある。

『何時頃なんじごろに帰ると言つた。』

『何とも被仰おつしやいませんでした。』と房は言悪さうに答へる。

後藤へ廻まはるなら廻まはると朝自分あさが出る前にいくらでも言ふ時があるじやアないかと思ふと、銀之助は思はず

『人を馬鹿にして居やアがる。』と唸うなるやうに言つた。そして酒ばかりぐいぐい呑むので、房は

『旦那様だんなさま何か召上めしあがりませんか。』と如何かして気慊きげんを取る積つも

りで優しく言つた。

『見ろ、何が食へる。薄ら寒い秋の末すゑに熱い汁が一杯吸すへないなんて情なさけないことがあるものか。下宿屋だつて汁ぐらゐる吸はせる。』

銀之助の不平は最早もう二月前ふたつきからのことである。そして平時いづつも此この不平を明あからさま白まに口へ出して言ふ時は『下宿屋だつて』をもちだ持出す。決して腹の底の或あるもの物ものは出さない。

房ふさは『下宿屋』が出たので沈黙だまつて了しまつた。銀之助は急に起立たちあがつて。

『出て来る。』

『最早もう直ちき奥おく様さんがお帰宅かへりになりませう。』と房ふさは驚おどいて止とめるやうに言つた。

『奥様の帰宅のを待たないでも可いじやアないか。』

銀之助はむちやくちや腹で酒ばかり呑んで斯うやつて居るのが、女房の帰へるのを待つて居るやうな気がしたので急に外に飛び出したくなつたのである。

『外で何を勝手な真似をして居るか解りもしない女房のお帰宅を謹んでお待ち申す亭主じやアないぞ』といふのが銀之助の腹である。

『それはさうで御座いますが、最早直きお帰りになりませうから。』と房は飽くまで止めやうとした。

『帰つたつて可いじやアないか。乃公は出るから』と言ひ放つて、何か思ひ着いたと見え、急速いで二階に上つた。

火鉢には桜炭さくらずみが埋いかつて、小さな鉄瓶てつびんからは湯氣を吐いて居る。空気洋燈らんぷが煌々くわうくと耀かざいて書棚の角々かどくや、金文字入りの書ほんや、置時計や、水彩画の金縁きんぶちや、籐とうのソハに敷しいてある白び狐やくこの銀毛ぎんまうなどに反射して部屋は綺麗きれいで陽氣である、銀之助はこれが好すきである。しかし今夜は此等これらの光景も彼を誘いらいん引する力が少しもない。机の上に置いてある彼が不在中に来た封書や葉書はがきを手早く調べた。其そのうち中に一通差出人さしだしにんの姓名の書いてない封書があつた。不審に思つて先まづ封を切つて見ると驚くまいことか彼が今の妻と結婚しない以前に關係のあつた静しづといふ女からの手紙である。

銀之助は静しづと結婚する積つもりであつたけれど教育が無いとか身分

が卑いやしいとかいふ非難が親族や朋友ほういうの間に起り、且かつ其純潔そのす
 ら疑うたがはれたので遂つひに何時いつとはなしに銀之助の方から別れて了しまつ
 たのであつた。別れて今の妻さいと結婚して後は静しづの成行なりゆきに就つき銀
 之助は全く知らなかつた。

ところが五年目に突然此手紙この、何事かと驚いて読み下すと其意その
 味は——お別れしてから種々の運命めに遇あつた末今は或男あると夫婦同様
 になつて居る、然しかるに貴様あなたさまとの関係と同じく矢張男の家で結
 婚を許さない、その為め男は遂つひに家出して今は愛宕町何丁目何
 番地をがはかた小川方に二人して日蔭者ひかげものの生活くらしをして居る。窮迫きゆうはくに
 窮きゆう迫はくを重ね、ちびくした借金も積りて今は何としても立行たちゆ
 かぬ様さまとなつた。そこで如何いかなることがあつても貴様あなたさまにはと

誓つて居たけれど其誓も捨て義理も忘れてお願い申すのである、
 何卒二十円だけ用意して明晩来て呉れまいか——といふので
 ある。

明晩とは今夜である銀之助はしみ／＼静の不^{ふしあはせ}幸^せを思つた。
 静は男に愛着はれ又た男を愛着ふ女である。そして可憐^{かれん}で正直で
 伶俐な女であるが不思議と関係のない者からは卑^{いや}しい人間のやう
 に思はれる女で実に何者にか誑^{のろ}はれて居るのではないかと思つた。
 しかし銀之助には以前の恋の情は少もなかつた。

どうせ飛び出すのだ、何しろ訪ねて見ようと銀之助は先づ懐^{くわい}
 中^{ちゆう}を改めると五円札が一枚と余^{あと}は小銭^{こせん}で五六十銭あるばかり。
 これでも仕方がない不足の分は先方^{むかふ}の様子を見てからの事と直^すぐ

下に降りた。

『房、遅くなつたら閉めても可いよ。』

『アラ如何してもお出になりますので御座いますか。』と房はきよとくして気が気でない。

『何に心配しないでも可いよ。奥様に急に用が出来たから出たつて言つてお呉れ。』

外は星夜で風の無い静かな晩である。左へ廻れば公園脇の電車道、銀之助は右に折れてお濠辺の通行のない方を選んだ。ふと気が着いて自家から二三丁先の或家の瓦斯燈で時計を見ると八時過である。

外で冷かな空気に触れると酔が足りない。もすこし飲んで出れ

ば可^よかつたと思つた。

愛宕町^{あたごちやう}は七八丁の距離しかないので銀之助は静^{しづ}のこと、今の妻^{さい}の元子^{もとこ}のことを考へながら、歩^{あゆ}むともなく、徐々^{のろく}歩^あるいた。

成程^{なるほど}比べて見ると静^{しづ}には何処^{どこ}か卑^{いや}しいところがあつて、元子にはそれが無い。

静^{しづ}の卑^{いや}しいやうに他^{ひと}から思はれるところは何故^{なぜ}であるかと考へた。静^{しづ}には何処^{どこ}かに色^{いろ}ツぽい風^{ふう}がある。女性^{にょせい}にはなくてならぬ^{みさを}。節操^{みさを}といふ釘^{くぎ}が一本^{ほん}足りないで、其^{その}ため^{そのた}身体^{からだ}全体に『たるみ』が出来て居る、其^{その}『たるみ』が卑^{いや}しい色を成して居るのだ、それが証拠^{しづ}には自分の前^{まへ}に静^{しづ}には情夫^{をとこ}が有つたらしく、自分の後^{のち}に今の男があるではないか。

けれども自分の経験に依ると静は自分と関係してゐる間は決して自分を不安に思はしめるやうなことは無かつた。正直で可憐で柔和で身も魂も自分に捧げて居るやうであつた。

銀之助は斯う考がへて来ると解らなくなつた。節操といふものが解らなくなつた。

成程元子は見たところ節操々々して居る。けれど講習会を名に何をして居るか知れたものでない。想像して見ると不審の点は数多もある。今夜だつて何を働いて居るか自分は見て居ない。自分の見る事も出来ないこと、それが自分に猛烈な苦惱を与へることを元子は実行して居るではないか。

考へれば考へるほど銀之助には解らなくなつた。忌々しさう

に頭を振ふつて、急に急いそぎあし足あしで愛宕町あたごちやうの闇くらい狭ろぢい路地ろぢをぐるく廻まはつて漸やつと格子戸かうしどの小さな二階屋かいやに「小川をがはかた」と薄暗がすとうい瓦斯燈がすとうの点つけてあるのを発見めつけた。「小川方をがはかた」とあつた、よろしいこれだと、躊躇ためらうことなく格子かうしを開あけて

『お宅しづにお静さんしづといふ人が同居しづし居まられますか。』

と訊きくや、直すぐ現まはれたのが静しづであつた。

『能よく来きて下くださいました。待まつて居またんですよ。サアどうか上あがつて下くださいましな。』と低い艶つやのある声こゑは昔むかしのまゝである。

『イヤ上あがるまい。貴方あなたは一ちよつと寸すん出でられませんか。』

『そうね、一ちよつと寸すん待まちつて下ください。』と急いそいで二階にかいへ上あがつたが間まもなく降おりて来きて

『それでは其所そこいらまで御ご一所いっしょに歩あるきませう。』

二人は並んで黙つて路地を出た。出るや直すぐ銀之助は

『よくこれが出しましたね。』と親指を静しづの眼めの前へ突き出した。

『アラ彼あんなな事を。相あひかは変かはらず口が悪いのね。』

『別れてから、たつた五年じアありませんか。』

『ほんとに五年になりますね、昨日きのふのやうだけれど。』

二人ふたりの言葉は一寸ちよつと途断とぎれた。そして何所どこへともなく目的あてどなく歩あるい

て居るのである。

『今のこれとは何時いつからです。』と銀之助は又またた親指を出した。

『これはお止よしなさいよ、変まですから。一昨をととし年の冬からです。』

『それまでは。』

『貴様あなたと不可いなくなつてから唯ただ家うちに居ました。』

『たゞ。』

『そうよ。』と言つて『おゝ薄うら寒やい』と静しづは銀之助ぎんに寄より添そつた。銀之助ぎんは思おもはず左ひだりの手てを静しづの肩かたに掛かけかけたが止とめた。

『僕わも酔よひが醒さめかゝつて寒やくなつて来きた。静しづちやんさへ差さつかへ無なけれあ彼かの角かどの西せい洋やう料りょう理りへ上あがつてゆゆつくり話わしませう。』

静しづは一いち寸すん考こうへて居ゐたが

『最も早う遅ちいでせう。』

『ナアに未まだ。』

静しづは又また一いち寸すん考こうへて

『貴あな郎たし私ねのお願がを叶ひへて下かすつて。』と言いはれて氣きが着つき、銀之

助は停止たちどまつた。

『実は僕ぼく今夜は五円札一枚しか持もつて居ゐないのだ。これは僕の小こづか使ひせん銭の余りだから可いいやうなものゝ若もしか二十円と纏まとると、鍵かぎの番人をして居ゐる妻さいくん君の手からは兎とても取とれつこない。どうかして僕ぼくが他よそから工面くめんしなければならぬのは貴女あなたにも解わかるでせう。だから今夜はこれだけお持もちなさい。余あとは二三日中うちに如何どうにか為しますから。』と紙かみいれ入さつから札だしを出して静しづに渡わたした。

『ほんとに私わたしは、こんなことが貴郎あなたに言いはれた義理ぎりぢアないんですけれど、手紙で申まし上げたやうな訳わけで……』

『最早もう可いいよ、僕ぼくには解わかつてゐるから。』

『だつて全く貴様あなたに願ねがひして見みる外ほか方法ほうほうが尽つきちやつたのですよ

……。」
 『最早解つてますよ。それで余の分は何れ二三日中に持て来ます』。

銀之助は静に分れて最早歩くのが嫌になり、車を飛ばして自宅に帰つた。遅くなるとか、閉めても可いとか房に言つたのを忘れて了つたのである。

帰つて見ると未だ元子は帰宅して居ない。房も気嫌を取る言葉がないので沈黙して横を向いてると、銀之助は自分でウヰスキーの瓶とコップを持って二階へ駈け上がった。

精で三四杯あほり立てたので酔が一時に発して眼がぐらぐら

して来た。此このとき時

『断然もとこ元子を追ひ出して静しづを奪つて来る。卑いやしくつても節操みさをがなくつても静しづの方が可い』といふ感が猛然と彼の頭に上のぼつた。
 『静しづが可い、静しづが可い』と彼は心に繰くりかへ返しながら室内をのそ／＼歩いて居たが、突然ソハの上に倒れて両手を顔にあて、溢あふる／＼涙を押おさへた。

(明治40年9月「太陽」)

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第2巻 国木田独歩」筑摩書房

2001（平成13）年1月15日初版第1刷発行

底本の親本：「国木田独歩全集 4巻」学習研究社

1966（昭和41）年1月

初出：「太陽」博文館

1907（明治40）年9月

入力：iritamago

校正：多羅尾伴内

2004年7月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

節操

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>